

セメント質は、歯科医史的には最後に発見された歯牙硬組織である。そのため、現代にいたるまで、さまざまな論説が行なわれている。組織を分類したケリカーは、『組織学全書』（初版）の中で、骨組織として取り扱っている。

第二セメントと原生セメントに分類したのは、1910年島峰徹であった。島峰徹は、1907年6月にドイツへ出発し、同年10月ベルリン大学医科大学の歯学科に入学、一般歯科医学の課程一カ年半終了後、口腔外科学と歯牙病理学を専攻、1909年ブレスラウ大学に転じ、歯科口腔外科の無給助手となった。歯科口腔外科主任パルチ教授のもとで、セメント質の分類に関する研究を行い1910年「Das sekundäre Zement」として、『Deutsche Zahnheilkunde』に発表した。

この論考に対し藤田恒太郎は、「比較解剖学的に見ると、原生セメントは必ずしも第二セメントに先立って発生するものではない。例えば齧歯類の切歯の後面は純粋の原生セメントから出来ているが、草食類の歯冠でははじめから細胞を含んだセメント質すなわち第二セメントが作られる。また人の歯でも、後に述べるように、第二セメントの各層の間にはさまれた層板間層という部分はその組織学的構造は原生セメントなのである。このように考えて来ると、島峰氏の原生セメント・第二セメントという命名法はいささか不合理であるといわざるを得ない。」と述べている。今回、島峰徹の原文にあたり、論考を試みた。

## 29) Lehrbuch der normale Histologie und Entwicklungsgeschichte der Zähne des Menschen von Prof. Dr. Wilhelm Meyer

Textbook of Normal Histology and Embryology of Human Teeth Written by Prof. Dr. Wilhelm Meyer

大垣女子短期大学 下総 高次

Takaji Shimoosa, Ogaki Women's College

東京高等歯科医学校は、昭和3年10月12日に創立し、昭和4年4月開校と共に、政府を通じて、ドイツからすぐれた教師を招聘した。第1回は、ベルリン大学教授兼同大学歯学部長の Dr. W.

Dieck であった。第2回は、ブレスラウ大学教授・歯学部長の H. Euler が来日する予定であったが、代わりに一門の Dr. Wilhelm Meyer が来日した。記録によると、「昭和7(1932)年2月15日、ブレスラウ大学助教授ウィルヘルム・マイヤー博士、本校傭外国人教師として招聘す」「昭和8年11月17日、傭外国人ウィルヘルム・マイヤー 満期帰国の途に就く」とある。

この間にあって、Dr. Meyer は歯牙組織学の授業を分担し、スライドを用いた毎週1回の講義を行なった。また、若い研究者たちの相談相手になると共に、口腔病学会の各例会には口演発表をし、総会には特別講演を行なっている。その他、口腔病学会主催の数週間の短期講習会を担当したり、他校の歯科医学会総会で特別講演を行なうなど、精力的に活躍した。1932(昭和7)年春には、「Lehrbuch der normale Histologie und Entwicklungsgeschichte der Zähne des Menschen. von Prof. Dr. Wilhelm Meyer」が、Rehman 歯科医学教科書第1巻、ゲッティンゲン大学教授 Dr. H. H. Rebel 編集として出版された。この Meyer と Rebel の両氏は、演者が第29回本学会総会(平成13.10.20)で発表した「Port=Euler Lehrbuch der Zahnheilkunde 1929」における H. Euler 教授の協同執筆者である。

本書の体裁：頁245、図付334、表26。

本書の特徴：これまでの知識の根本的訂正によってもたらされた、新しい結果の総括をした。本書は、学生にとって最初に手にするものであるから、できる限り簡潔に客観的に記述した。写真は、わずか数カ所の部分を除いて、著者自身の修正なしの顕微鏡写真である。Allerheiligen-hospital の産婦人科とブレスラウの H. Höland 博士の協力で、100以上の胚芽(胎児)が集められ、任意の年齢、任意の数において、顕微鏡写真や発生学の複構模型に有効に使用することができた。

内容目次

### A. 組織学 (11~129 頁)

1. エナメル質 2. 象牙質 3. 歯髄 4. 支持組織 a) セメント質 b) 歯根膜 c) 歯槽及び歯槽突起 d) 歯牙の生理的移動 e) 歯肉

### B. 発生学 (130~245 頁)

1. 上顎及び下顎における歯堤の発生(形成)

2. 各乳歯歯胚における鐘型の完成
  - a) 前歯 b) 臼歯
3. Bolk の二元説
4. 結合組織の共同関与
5. 口腔前庭の発生と副歯堤の意義
6. 歯冠の形成
7. 象牙質の組織発生
8. エナメル質の組織発生
9. 歯槽の形成
10. 歯根と歯根膜の形成—歯牙の萌出
11. 支持組織の組織発生
12. 代生歯の発生
13. 歯発生 (生歯)
14. 表による各萌出歯牙についての概要

金森虎男教授は、当時、口腔外科学と歯牙組織学の講義を担当していたが、この Dr. Meyer の著書を学生の教科書として指定した。学生は鮮明で豊富な写真を観ると同時に、添えてあるドイツ語の説明文を、辞書を引きながら訳すことなどから始めて、本書の内容をかなり理解できたのである。

なお、金森教授は、昭和 9 (1934) 年 4 月 6 日をもって、東大教授に栄転した。

他方、藤田恒太郎教授は、昭和 8 年 1 月 14 日に神戸港を出発してドイツに留学し、英米を経て、昭和 10 年 5 月 30 日に帰国した。

すると、金原書店より「島峰歯学全書」出版の企画がされていた。藤田教授の担当は、人体解剖学と口腔の局所解剖学とであった。ところが、金森教授から「自分は歯牙組織学を受持つことになっているが、多忙で到底不可能なため、是非引き受けてもらいたい。」と申し出があった。藤田教授はこれを即座に引き受けた。歯についての知識は至って貧しかったが、本を書くことによって、歯牙組織学を勉強しようと決心したからである。ここで大いに役立ったのは、駒井駿吉助手 (昭和 6 年 11 月採用、昭和 4 年日本歯科医専卒) が、藤田教授留学中の 2 年半の間に、Dr. Meyer から習得した技術と知識とによって、多数の優れた顕微鏡標本を作っておいてくれたことである。藤田教授はまず勉強のため、Meyer の歯牙組織学、発生学教科書を 2 度 3 度読んで、それを翻訳した。その際に必要な顕微鏡写真や挿画の案をつくり、着々と作業を進め、2 年足らずで完成した。「歯牙組織学 (島峰歯学全書 第 11 巻 第 1 冊) : 東京高

等歯科医学校教授 藤田恒太郎著、昭和 12 年 4 月 5 日初版、図版 210、頁 167+21 (文献表)、金原書店、定価 8 円」である。本書の特徴は、ドイツの教科書に近い性格を持たせたところにある。記載はできるだけ詳しく、夫々の形象の知見発達の歴史を明らかにし、価値ある文献を一々吟味して、巻末に大きな文献表を加えた点にある。名著と評された。学生間に好評をもって迎えられた。

以上、W. Meyer 教授は、2 年足らずの日本滞在であったが、歯科教育に尽力すると共に、歯科医学に対し多くの貢献をしたのである。

### 30) 宗炳の思想

#### Zong Bing's Concept

医の博物館 ○西巻 明彦  
陶 栗爛

Akihiko Nishimaki and Suxian Tao, Museum of Medicine and Dentistry

宗炳 (375~443) は、字は少文、南陽涅陽の人で、士大夫階級の出身である。『宋書』巻 93「本伝」によれば、秀才の誉れが高かったが、官職につかず、山水に遊んだと言う。そのわけを問われると、「丘に棲み谷に飲み、三十余年なり」と答えたと言われている。後に「廬山に入り、釈慧遠に就きて文義を考尋」と『宋書』に記されている。釈慧遠は、中国浄土教の開祖で、中国仏教界に大きな影響を与え、宗炳自身も、釈慧遠の高弟とされている。宗炳は、その書『明仏論』で、神不滅と三教合一論 (仏教・儒教・道教) を論じている。『弘明集』の中の、宋の何承天「宗居士に与える書」によれば、「足下は西方の法事に勤む」と書かれ、宗炳も、弥陀浄土を信仰していたと考えられる。

当時の中国は、皇帝権が衰退し、皇帝が臣下を、臣下が皇帝を殺し合う時代であった。当時の中国は、道教は土俗宗教で、儒教がくずれた間隙を埋めていったのは仏教であった。士大夫階級に広まった仏教も民衆に布教する時点で、道教、儒教との取り込みが行われ、その背景のもとに書かれたのが『明仏論』である。『画山水序』の一説、「山水にいたっては、質は有にして霊に趨く」の「霊」とは何であったのか。宗炳の師、慧遠は『沙門不敬王書論』の中で、「形は尽くるも神は滅せず」と